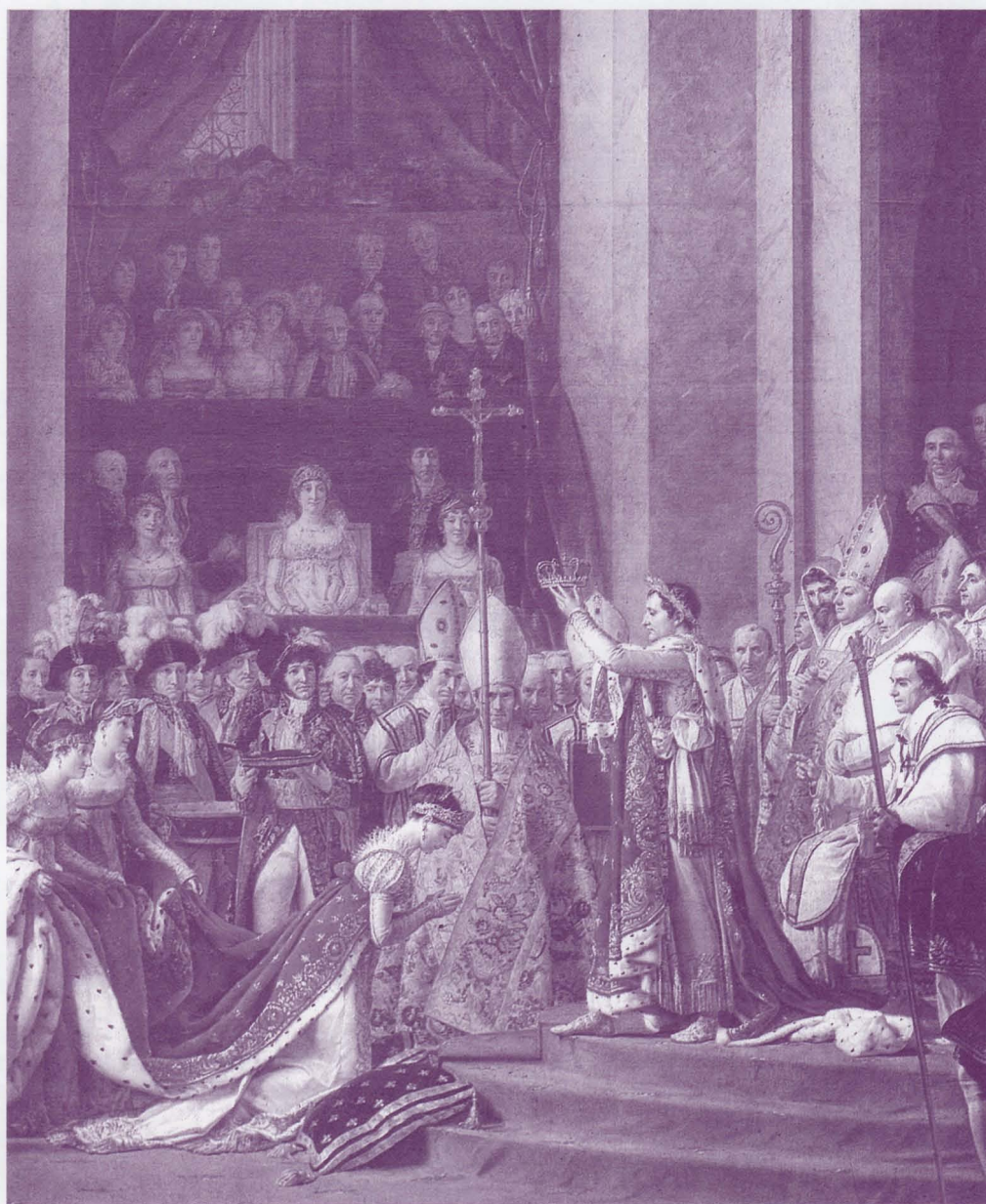


カメラータ・ナガノ

第21回定期演奏会



J.-L. ダヴィッド画《戴冠式》（部分）

2010年12月26日(日) 開演14:00
メルパルクNAGANOホール

主催：カメラータ・ナガノ
後援：長野市教育委員会・NBS長野放送・長野音楽文化協議会

ごあいさつ

本日はお忙しい中、カメラータ・ナガノの第21回定期演奏会にお越しいただきありがとうございます。

去年は20回記念で文京区民オーケストラとのジョイントをはたしました。去年の縁で文京さんから数人の応援をいただいておりますが、今年からまたカメラータ・ナガノの単独演奏会を積み重ねて参ります。

カメラータ・ナガノは、管楽アンサンブルからはじまった少人数の室内オーケストラですが、今年はまた原点に戻ったプログラムを企画しました。お送りする曲は弦楽合奏として、エルガーの弦楽セレナード、管楽合奏としてモーツァルトのセレナード第12番ハ短調、そしてベートーヴェンの交響曲第3番“英雄”です。英雄と聞いて、“えっ、室内オーケストラのカメラータ・ナガノで英雄？”と思われた方もいらっしゃるでしょう。しかし、松下先生の分析によると、本来大オーケストラのために書かれた作品ではないとのこと。実際私たちも練習を通じてそのことを実感しています。4楽章の前半部分など、弦楽4重奏にしてしまった部分もあります。今日はカメラータ・ナガノだからこそその英雄をお聞きいただきたいと思います。

カメラータ・ナガノ
代表 縄田 昌司



E. エルガー

弦楽のためのセレナード ホ短調 Op.20

1. アレグロ ピアチエーヴォレ ホ短調 8分の6拍子 三部形式
2. ラルゲット ハ長調 4分の2拍子
3. アレグレット ト長調～ホ長調 8分の12拍子～8分の6拍子

W. A. モーツァルト

セレナード12番 ハ短調 K.388

1. アレグロ ハ短調 2分の2拍子 ソナタ形式
2. アンダンテ 変ホ長調 8分の3拍子 ソナタ形式
3. メヌエット・イン・カノーネ(カノンのメヌエット) ハ短調 4分の3拍子
4. アレグロ ハ短調 4分の2拍子 主題と変奏-中間部-主題と推移部-終結部という独特の形式

～ 休 憩 ～

L. V. ベートーヴェン

交響曲第3番 変ホ長調『英雄』Op.55

1. アレグロ コンプリオ 変ホ長調 4分の3拍子 ソナタ形式
2. 葬送行進曲 アダージョ アッサイ ハ短調 4分の2拍子 小ロンド形式
3. スケルツォ アレグロ ヴィヴァーチェ 変ホ長調 4分の3拍子 複合三部形式
4. アレグロ モルト 変ホ長調 4分の2拍子 自由な形式による変奏曲

Program Note

E.エルガー 弦楽のためのセレナード ホ短調 Op.20

エドワード・エルガー（1857－1934）の生涯や作曲活動について述べる時、キャロライン・アリス・ロバーツについて触れない訳にはいかないでしょう。エルガーがいまだ作曲家として世に広く認められていなかった頃、彼のピアノの生徒となったキャロラインはその後生涯にわたってエルガーを支え続けます。特に結婚してから10年間ほどは作品もそれほど評価されず、キャロラインが懸命に家計を支えていました。彼女なくては、エルガーは作曲活動を継続することも困難だったことでしょう。エルガーの名が世界に知れ渡るきっかけは1899年、「エニグマ(謎)変奏曲」初演の大成功でした。エルガーが妻を喜ばせようと、彼女の気に入った旋律を主題に、妻と親しい友人をイメージした変奏を付して演奏したことがこの作曲背景と言われています。このように、エルガーの重要な作品の多くにはキャロラインの存在なくしてはあり得なかったものが多くあります。

「弦楽のためのセレナード」もその一つといっても良いでしょう。これは1892年にキャロラインとの3回目の結婚記念日に彼女に贈られました。婚約記念の「愛の挨拶」とともに、比較的早くから割合に演奏機会に恵まれ作品が評価された、いわば出世作の一つとも考えることができます。

そのような成立背景もあってか、全曲をとらえてロマンティックでありながらも清楚な印象にあふれ、まさに恋歌の（でも決してくどくない）「セレナード」を聴かせてくれます。

W.A.モーツァルト セレナード12番 ハ短調 K.388 (384a)

オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2の4組8本の管楽合奏の編成。全部で13曲残されているモーツァルトのセレナードの中で唯一の短調の作品である。作曲の目的は不明（7月27日の手紙）で、諸説があるが、単なる社交的な娯楽性を越えたセレナードになっており、「ハーモニウムジーク」といわれる、この編成の頂点に君臨する作品である。

この曲のタイトル「ナハトムジーク」（ドイツ語で「夜の音楽」という意味）は、その7月27日の手紙の中で、モーツァルト自身が父レオポルトに“最初のアレグロしかお目にかけないので、びっくりなさるでしょう。でも、ほかに仕様がなかったのです。急いで夜曲を一つ、といってもただの吹奏楽用に（さもないとお父さんのために使えたでしょうが）、書かなければならなかったのです。31日の水曜日に二つのメヌエットとアンダンテと終曲を…できれば行進曲も…お送りします。”（柴田治三郎「モーツァルトの手紙(下)」岩波文庫P.64）と書いていることから、そう呼ばれているものである。なお、上記で「アレグロ」とか「二つのメヌエットとアンダンテ」などと書いているのは、「ハフナー・シンフォニー」K.385のことである。

アインシュタインは“われわれは動機や注文者についてはなにも知らない。また注文者がこのセレナードをそんなに急に欲しかったのか、それともこの曲が急にモーツァルトの魂からほとばしり出たのか、ということもわかっていない。これは本当に野外のための《ナハトムジーク》なのだろうか？ 普通の4楽章だけで、第一メヌエットも、第二の緩徐楽章も、両端の楽章のための導入部も行進曲もないのである。ハ短調という暗い調性は、モーツァルトの社交音楽のなかでは唯一無二のものである。ト短調がモーツァルトにおける宿命の調性ならば、ハ短調は劇的な調性であり、いわば、叙情的なものがたえず陰気な発作に襲われるのである。この第1楽章はハ短調ピアノコンチェルト（K.491）への道を開いていると同時に、ベートーベンの第5シンフォニーへの道も開いている。”（浅井真男訳「その人間と作品」白水社P.286）と述べている。

なお、よく知られているように、モーツァルトは1787年にこれを弦楽五重奏曲K.406（516B）に編曲している。

L.V.ベートーヴェン 交響曲第3番 変木長調『英雄』 Op.55

ベートーヴェンの交響曲の作曲は30歳頃(第1番)から晩年(第9番)にまでわたり、特に30代始めのころは8年という短期間のうちに6曲と、かなり集中して交響曲を作曲・発表している。この時期、ベートーヴェンは偉大な先達からの基礎的な作曲技法を修得して単なる「ピアノ(即興演奏)の名手」からの脱却を果たそうとしており、第6番までの各交響曲の作曲にあたっては新進気鋭の作曲家として常に革新的であろうとしていたことが見て取れる。

第3番の交響曲は其中でもとりわけ意欲的な作品といって良いだろう。どのあたりが…？それを語るネタは豊富にあるが、本日お越しの皆さんはおそらく文字を読みにいらした訳ではないので、象徴的なものを一つ。「第9番を除けば、演奏時間が最長」である。

勿体ぶって書くほどのことではないと思われるかもしれない。だが筆者にはこう思えて仕方がない。若きベートーヴェンが溢れる楽想と様々な構想・展開法を投入しまくった結果これだけ長大になってしまった、と。そこには構造を切詰め圧縮して緊張感を醸成するとか、様々な要素をバランスさせて構築するとかいうような、熟練の技というか巧みさは感じられない。ベートーヴェンの想いあるのみ。…いかがでしょう？

これだけだと悪口のように読めてしまうので慌てて付け加えるが、1時間もあろうかという曲を中弛みせず聴けるよう作曲しているあたり、天才の技といえると思う。ベートーヴェンがこの曲で打ち出した革新性あるいは特徴は、すべて聴きどころといって構わないだろう。かつてなく拡大されたソナタ形式による一楽章(特に第二展開部という位充実したコーダ部)、葬送行進曲を交響曲に持ち込む発想(注目すべきは2拍子=行進曲であるところ。ただの緩徐楽章ではないのだ)、スケルツォ楽章の存在確立、自由で実験的な変奏を展開する四楽章(軽妙洒脱⇔重厚長大)。また各楽器・声部の扱いも面白い。弦楽器5パートがこれほど独立した(ポリフォニーを合唱するような楽しみがある)曲は初めてではないか？そして、何故ホルンは3本…？

もしこの曲の途中で飽きてしまうとしたら、それはおそらく演奏の問題でしょう。本日はそうならぬよう緊張感と共感を持って演奏したいと思い、またそれができるメンバーに恵まれていると思っている。…よろしくお願いします！

ところで、この曲の成立背景でほぼ確実に語られるのがナポレオン・ボナパルトとの関係であるが、諸説ある話題なので(文章で書くとな一方的になるため)ここでは触れないでおこう。それぞれの解釈を持ち寄って対面で話したほうが面白いと思うので、ご存じでない方は調べてみて下さい。

Profile



松下 功 (MATSUSHITA, Isao)

東京藝術大学、及び同大学院を終了後、ベルリン芸術大学で研鑽を積む。日本音楽コンクール作曲部門入賞、メンヒェングラードバッハ国際作曲コンクール第1位、第7回入野賞受賞。「World Music Days グラーツ大会・香港大会・メキシコ大会」、「ベルリン芸術祭」、「アジア音楽祭」等、多くの音楽祭でその作品が演奏される。1996年には、北京において「松下功管弦楽作品演奏会」が開催される。2000年には、和太鼓協奏曲「飛天遊」がベルリン・フィル・ワールドピュネコンサートで演奏され、25000人の聴衆から絶賛される。

作曲・指揮・音楽企画など幅広く活動し、「アジア音楽週間2000 in 横浜」「アジア音楽週間2003 in 東京」の実行委員長を務める。アジアの現代音楽に詳しく、アジア各地の作曲家との交流も深い。指揮者としても古典から現代まで幅広いレパートリーを持ち、札幌交響楽団、上海交響楽団、東京フィルハーモニーなど、各地のオーケストラを指揮している。

長野においては、冬季オリンピック・行進曲「信州民謡パラフレーズ」、オペラ「信濃の国・善光寺物語」の作曲を担当するほか、善光寺で「第九奉納演奏」、白鳥バレエ学園との「白鳥の湖」、「コッペリア」等を指揮するなど、長く長野に根付いた活動を行っている。2004年11月には白鳥バレエ学園からの委嘱により、バレエ「戸隠物語」を作曲・指揮し公演を成功に導く。また、2006年10月には、長野の八幸会委嘱による邦楽合奏とオーケストラのための「誘いの舞」を、八幸会とカメラータ・ナガノにより初演し好評を博す。

現在、東京藝術大学演奏芸術センター教授、アンサンブル東風代表、カメラータ・ナガノ音楽監督兼常任指揮者、文京区民オーケストラ指揮者。

出演者

音楽監督 松下功

フルート 宇治義浩 早川 育(賛助)
オーボエ 縄田昌司 高橋健美
クラリネット 湯本正芳 続木奏絵 伝田高広
ファゴット 中村由美夫 新林友美(賛助) 山上貴司
ホルン 金井 弘 飯森芳宏 山口直人
トランペット 金井幹雄(賛助) 小山修二(賛助)
ティンパニ 塚田喜幸

1stバイオリン 外山陽子 清水きよみ 竹村恵里 吉池明子
渡辺伸啓(賛助) 土屋早苗(賛助)
2ndバイオリン 下平朋彦 鈴木里佳 棚町公一朗(賛助)
棚町記身予(賛助) 江戸正寿(賛助)
ビオラ 田中美恵子(賛助) 石田玲子(賛助) 田中佑美(賛助)
山口美智子(賛助)
チェロ 深見悠矢 北沢加奈子(賛助) 山口芽久美(賛助)
小島遼子(賛助)
コントラバス 梅澤敦子(賛助) 益本和代(賛助)